井上樹彦日本放送協会会長殿

初めてお便り申し上げます。私は初代総力戦研究所所長飯村穣の孫です。

今日は、NHKの番組により深く傷つけられた孫として、またNHKが公共放送として歴史を正しく後世に伝える使命を立派に果たされることを期待する一国民として、さらには受信料を払う一人の視聴者としてこの公開書簡を書いています。

私は、貴会長が係争中ということを盾にひたすら沈黙するのではなく、堂々と表に出て、私と公開の対話をされることを希望します。公開がお嫌ならば非公開でも結構です。私はあなた達NHKの皆さんがいかに非道なことをやられたのかを直接説明したいと思っています。

また、石井裕也監督については、昨年9月17日の稲葉会長の定例記者会見において、時が来たら自分の考えを述べるとの彼のメッセージが読み上げられたまま一年近くがたちました。いまだに公の場に出ることを避けています。貴会長と石井裕也監督が説明責任を果たすことを求めるためにこの書簡を書いています。訴訟中と称してあなた達は私との対話を拒否しているのです。私は志を同じくする方々とご一緒して、先週からマイクを持って街頭に立ちました。あなた達が対話を拒否する限り、広く日本国内で、街頭でも、いずれの場所においても、マイクを持って謝罪と上映中止を求める声をあげていくつもりです。

そもそも、問題はNHKが昨年8月16日・17日のNHKスペシャルの番組として終戦80年を記念して「シミュレーション 昭和16年夏の敗戦」と称する杜撰な番組を放映したことに遡ります。

この番組が私の祖父飯村穣の名誉を傷つけ、歴史を改ざんしたものであったと私が考えていること、その結果私が昨年12月25日に東京地裁に対して祖父の名誉毀損で訴えを起こしたこと、さらにこのテレビ番組が映画化され、來る7月31日に日本全国で上映が開始される予定になっていることはご存知の通りです。これを受けて私からは7月22日に行われる第3回口頭弁論では従来よりの訴えに加え、映画の上映等の差し止めも請求することになります。

また、「開戦前夜」製作委員会はこの映画の海外販売に乗り出しています。その影響もあってか、最近では香港の新聞がこの問題をオンラインで報道し、数十万という中国語圏の人々が閲覧しているようです。香港のみならず中国やその他の国々でも関心が持たれ始めている気配が感じられます。このテレビ番組と映画における東條英機像の修正がかつての連合国内で関心を呼び始めているのかもしれません。中国が第二次大戦後作られた国際秩序を日本が壊そうとしているとして「新型軍国主義」批判を始めていることはご存知の通りです。この映画がその批判に利用されないことを祈るのみです。

本日お便り申し上げている目的は、NHKなど映画関係5社と 石井裕也監督が総力戦研究所をめぐるさまざま な歴史的事実を舞台としつつ、フィクションという衣をかぶって、日米戦争回避のために努力をしていた祖父を卑劣で好戦的な人物として描くという信じ難い過ちを犯したことに対する批判を改めて繰り返すことではありません。

この公開書簡では貴会長とNHKという組織が「沈黙の城」に篭りつつ、ある時は雲隠れし、別の時には既成事実を押し付ける手法に頼るという不誠実な態度を問題にしたいと思います。NHKのこ のような手法が私にどのように見えるか理解していただきたいと思います。

遡れば、第一期はテレビ番組放映前の何年かにわたる時期です。長い準備期間があったにもかかわらず、その間ドラマを作っておられる方々からは一度も私への取材はありませんでした。NHKスペシャル事務局長の松本卓臣氏が「プロセスにおいて過ちがあったことは謝罪する」と言われたのは飯村穣を最もよく知っている私への取材が抜け落ちていたことを指しておられたのだと思います。NHKスペシャルに「真実」を期待する視聴者にとって、周到な取材なしに歴史ものが作られたことは驚きの事実でしょう。

第二期は、昨年7月21日にNHKのホームページで「シミュレーション 昭和16年夏の敗戦」と 言う番組が放映されることを知り、NHK側と協議を行った時期であります。私は歴史的事実に反する部分の修正を求め、また「総力戦研究所」の名称を使うことをやめて欲しい旨述べました。こ れに対してNHKスペシャルのチームの方々の返事は「もう遅すぎる。京都太秦の番組のセットは 既に壊してしまい、俳優たちも解散した」というものでした。できる事はテロップを入れたり、ドキュメンタリーパートをつけて、それに私の言い分を入れることのみだと言われました。これは既成事実を押し付ける手法であります。

第三期は、番組放映直後の時期でありますが、NHKの方々に2回お会いし、謝罪を要求しました。また映画化を予定しているとの話でしたので、映画内容が史実に即したものになるように石井裕也監督との面談、映画制作陣との定期的な話し合いの場を設けるようにお願いしました。し かしながら、その時は既に映画はほぼ完成しており、私が文句をつける余地もなかったことを後から知りました。これも既成事実の押し付けであります。

第四期は、のれんに腕押しのNHKに対し、私としてささやかな行動に出た時期であります。8月の終わりには記者会見を行い、BP O にこの問題を取り上げることを要望しました。また貴会長がNHKの副会長をやっておられたので、直接お話しすべくアポイントのお願いをしましたが、秘書の方からは「副会長は休暇だ」と言われ、応じていただけませんでした。担当の専務理事とのアポもお願いしましたが、担当者と会ってくれとの話でした。問題はランクが下に降りれば決定権がないようにみられ、上位の方にお会いしようとすれば面倒なことに関わりたくないとの姿勢が垣間みられ、外から見ればいわば無責任体制になっているように見られることでした。

この時期には、奇跡的にNHKの稲葉前会長が記者会見で、NHKスペシャル番組について、

批判的な見解を出されました。私はNHKに良心があると思ったものです。

しかしながら、この会長の発言もNHKの皆さんには完全に無視されたようです。つくづくNHKはすごい組織だと思います。外部からきた会長の発言は歯牙にも掛けないのです。

10月から11月にかけて、映画制作陣との話し合いが2回行われました。石井裕也監督は何故かその場におられませんでした。全く無内容な時間でした。その場で、製作委員会の代表としてNHKエンタープライズの代表の方から「これで飯村さんとの話し合いは終わりです」と言われました。人間社会で「これ以上あなたとは話さない」というのは結構衝撃的な発言です。この発言をされたNHKエンタープライズの方は自らの発言の重みを感じておられないようでした。こう言われれば、私の気持ちは司法の場で決めていただく方向に傾いていくのは当然ではないでしょうか。この話し合いのなかで唯一めあたらしいことを知ったのは、NHKは営利事業に携わることができないので、映画の製作委員会からは抜けるということでした。

第五期は、NHKに誠実な対応をもはや期待できないと考え、私が東京地裁に祖父の名誉棄損に関する訴えを起こした時期に始まります。昨年12月24日の事ですが、翌25日には「シミュレーション」の”完全”映画版「開戦前夜」の上映が製作委員会により発表されます。予告通りNHK本体は製作委員会から抜け、NHKグループのNHKエンタープライズが中核的な役割を担うことになります。 NHKの完全雲隠れの時期が始まりました。この時期には、稲葉会長がお辞めになり、井上新会長が着任されました。私の印象では、新会長の定例記者会見でも、本件に関する発言は山名副会長に任され、井上会長は後ろに引いておられます。山名副会長の発言は言ってみれば、NHK は本件に関わりがないので、何もコメントできないと言うものであり、三重の雲隠れ状況になって しまいました。すなわち、NHKが映画から抜けたことに加え、井上会長は、山名副会長に本件を 預け、山名副会長は、NHK営利事業に関わっていないので映画についてはノーコメントだと言う ことになりました。

対話はもうしないと述べて私を裁判に追い詰めておいて、今度は裁判になったから、もう話をしな いと言うのです。はっきりしている事は、私との対話はしたくないとの姿勢です。

これが現状であります。その間7月31日上映開始の準備は着々進められています。この映画の元は「シミュレーション 昭和16年夏の敗戦」であり、NHKスペシャルの番組です。ほとんどの画面はテレビ番組と映画は共通の素材を使っており、筋書きも全くと言っていいほど同じです。NHKは映画に自分たちは関係ないと言って口をぬぐっていることがでるのでしょうか？ NHKスペシャルと言う歴史の真実を伝えるというのが謳い文句の番組、先人たちが築き上げてきた名誉ある番組シリーズの名が汚され、歴史がおもちゃにされていることにつき、さらに一人の人間の人格を深く傷つけていることにつき、訴訟中であることを盾に頑なに沈黙を守っていて良いので しょうか。 裁判は場合によっては相当長期化するかもしれません。何年も何年も沈黙を守り続 ける

のでしょうか。私は命のある限り断固戦うつもりでおります。その間NHKの劣化現象は放置 されるのでしょうか。それがあなたの会長としてのレガシーになるのでしょうか。恥ずべきことだと 思いませんか。受信料を払っている視聴者は、自分達の収めた受信料がいわば映画「開戦前夜」の宣 伝費として使われていることを唯々諾々として受けいれ、おとなしい羊のように黙ってNHKに搾取され続けるとお考えでしょうか。私はそのような不誠実な行動は決して受け入れられることはないと思います。貴会長が事態打開のため英断を下されるとともに、重い口を開いて説明責任を果たされることを強く期待いたします。

2026年7月21日